

令和七年八月 国立劇場第一七八回舞踊公演

刀剣男士 髭切・膝丸がいざなう！ 日本舞踊の楽しみ

『綱館』
つなやかた

〱渡辺源次綱 武名を天下に輝かせり

綱 斯様に 候者は、頼光朝臣の四天王渡辺源次綱にて候。さても東

寺羅生門にて、鬼神の腕を切り取りしこの物忌みもあと一日。

〱綱は七日の物忌みして 仁王経を読誦なし 門戸を閉じてぞいたりける

〱甥をたずねて如月の 梅もいつしか色香うせ

〱綱が館に着きにけり

伯母 如何に綱、津の国の伯母が遙々と参りたり。この門疾く疾く開き候え

〱うちには綱の声高く

綱 遙々との御出でなれど、仔細あつて物忌みなれば、門のうちへはかなわず候。

伯母 何、門のうちへはかなわぬとな。

綱 是非に及ばず候。

〱あら曲もなき御事やな 和殿が幼きその時は 自ら抱きて育てつつ

和殿を綱と言わせしこと アア皆自らが恩ならずや 恩を知らぬは人ならず エエ汝は邪慳者かなと 声を上げてぞ泣き給う

〱さしにも猛き渡辺も あくまで伯母に口説かれて 是非なく門を押し

開き 奥の一間に

〱伯母を敬い頭を下げ

綱 　ただ今は物忌みゆえ、思わぬ失礼^{つかまつ}仕り候。まず御酒^{ごしゅいっこん}一献聞こし
召し候え。

綱 　伯母御前には、ひと差し御舞い候え。

伯母 　めでたき折なれば、舞おうずるにて候。

〱御酒^{みき}の機嫌をかりそめに　差す手引く手の末広や

伯母 　あら面白^{やまめく}の山廻り。

〱まず筑紫^{つくし}には彦の山　讃岐^{さぬき}に松山　降り積む雪の白峯や　河内^{かわち}に葛^{かつら}

城^き　名に大峰丹波　鬼住む山と聞こえしは　名も恐ろしき雲の奥

〱懐かしや

綱 　昔に変わらぬ御舞振り。ほとほと感じ入って候。

伯母 　何はさて、鬼の腕を切り取りし、その夜の次第、聞かせてたべ。

綱 　それは何より安きこと、さらば語り申すべし。

〱いざ語らんと座を構え

綱 　さてもこのほど羅生門に出ずるといふ、変化^{へんげ}を見届け証^{しるし}を建てん
と

〱鎧兜に身を固め　君より賜る名刀の　髭切という太刀を佩^はき

綱 　宿所を出でてまっしぐら、二条大路の大宮を、南頭に歩ませたり。

〱時しも一天かき曇り　降り来る雨は春ながら　車軸を流す激しさに

〱駒を放ちて石段へ上りて証の高札を　立つる折柄^{おりから}鳴動なし

綱 　一吹きさつと夜嵐の　ともに後ろの方よりして

〱兜^{かぶと}の鍔^{しころ}をむんずとつかみ　我をば宙へ引き上げたり

綱 　心得たりと前へ引く　弾みに兜の緒は切れて　段より下へ飛び降
りたり。

伯母 　その時、和殿はいかがせしぞ。

綱 これまでなりと切り取りし、腕を取って立ち帰り、君の御感ぎよかんに与あずかつて候。

〱綱が名をこそ上げにけり

伯母 してその腕はいずれにありや。

綱 即ちこれに。

〱と唐櫃からびつの 蓋打ち開けて 伯母の前にぞ直しける

〱その時伯母は彼の腕を ためつすがめつ しげしげと 眺め眺めてい

たりしが 次第次第に面色変わり 彼の腕かを取るよと見えしが忽たちまち

に 鬼神となつて飛び上がり

〱如何に綱 我こそは茨木童子なり 我が腕を取り返さんそのために

これまで来たると知らざるや

〱綱は怒りて早足さそくを踏み 切らんとすれども 虚空にあり 〱如何かな

して打ち取るべしと思えど次第に黒雲覆い 鬼神の姿は消え失せけれ

ば 彼の清明せいめいが勘文かんもんに 背そむきしことの口惜しさよ なお時を得て打ち

取るべしと 勇み立ったる武勇のほど 感ぜぬ者こそなかりけれ

※上演に際し、歌詞に多少の異同が生じる場合があります。あらかじめご了承ください。
※無断転載を禁じます。